一九世紀ドイツの東アジア像と帝国主義進出
絵入り新聞に映し出された世界認識

大井知範

はじめに

明治維新から一五〇周年の節目を迎えた現在、近代日本の始まりをめぐり各所で活発な議論が展開されている。幕末維新と日本の近代化に対する関心の高さは、近年刊行された出版物の数にも表れ、関連する行事や展覧会もこれまで多くの場所で開催された。こうしたイベントや著作を通じて、近代日本の出発点がどのようなものであったか我々に再考する機会が与えられている。

とはいえ、一九世紀の日本の歩みを一国史の枠内だけで考えることはできない。日本の近代化は、同時代の世界的な変動と密接に絡み合っていたのであり、欧米諸国との関係性のなかで育まれた。とりわけ、安政の五カ国条約を結んだ国々との関係が重要であったことは論をまたない。江戸時代以来の古いつながりを持つオランダ、近代化の模範たるイギリスとフランス、日本に大きな影響を与え続けたアメリカ、潜在的な脅威として立ちはだかったロシア、こういった国々と接するなかで日本は近代化の道を歩んでいたのである。

そしてもう一国、日本近代史を語るうえで欠かせないのがドイツとの関係である。明治日本は、法律、軍事、医学、学術など多岐にわたる分野でこの国から学び、いい意味でも悪い意味でもその背中を追い続けた。しかしながら、当時のドイツは日本と同時期に統一国家を建設したばかりの状態であり、自身も後れを取り戻すべく近代化に邁進していたことを忘れてはならない。つまり、当時の世界は「進んだ」西洋と「後れた」非西洋に区分される一方で、同じ西洋のなかでも近代化の進行に差が生じていた。プロイセンを中心とするドイツの「後れた」諸邦は、一九世紀の後半に「進んだ」ドイ

ツ帝国へと飛躍し、日本はその歩みを近代化の手本としたのである。

では近代化に突き進むドイツは、はるか遠方に位置する近代化途上の日本や中国をどのように見ていたのだろうか。つまり、この時代の近代化認識と非西洋観の間にはどのような相関関係があったのだろうか。本稿では、近代化の意味を考える一例をドイツに求め、その東アジアに対するまなざしと行動のなかから近代化にともなう世界認識の変容を探ってみたい。

近代ドイツと東アジアの関係をめぐっては、近年我が国でも重要な歴史研究の成果が出されている。しかしそれらの多くは、一九世紀中葉のプロイセンによる使節団派遣、および世紀転換期以降の政策的な伸張に重心が置かれ、認識の変化を長いスパンで通時的に捉えた研究はあまり見られない[1]。また欧米の学界では、政府や海軍の東アジア政策をめぐる研究は進展しているものの、社会史・文化史の視点に立ったドイツの東アジア認識については深く踏み込まれていない[2]。つまり、政治外交や経済、文化を通じたドイツと東アジアの結びつきは語られても、その根底に潜む認識の問題はいまだ十分に解き明かされていないのである[3]。

では、こうしたドイツ人の他者認識を我々はどのようにして抽出することができるであろうか。もちろん、この課題に対してさまざまな史料の活用が想定できるが、ここでは一九世紀に確立した近代的なジャーナリズムに注目してみたい。

というのも、それら大衆向けのメディアは、東アジアをはじめとする海外情報を国内に伝える中心的な媒体へと成長し、市民社会が他者像を構築するうえで重要な影響を与えていたからである。しかも、次第に視覚効果をともなった図像が定期刊行物に取り込まれ、特に一九世紀の半ばに登場した挿絵入り新聞がそれに果たした役割は大きかった[4]。

ドイツ語圏の視覚メディアに関しては、その日本像を対象にさまざまな先行研究でこれまで取り上げられてきた。たとえば、プロイセンの東アジア遠征隊（オイレンブルク使節団）が残した図像をめぐっては、ドブソンとサーラの図録が有益な手がかりを与えてくれる[5]。また、家庭向け絵入り週刊誌『ガルテンラウベ（Die Gartenlaube）』の日本描写についてはキムの論考があり、風刺雑誌に描かれた日本イメージの変遷についてはヴィッピヒが論説の主題としている[6]。定期刊行物以外にも、ドイツの一枚絵（Bilderbogen）や絵葉書に描写された日本イメージに関して、サーラ／稲葉やパンツァーらの研究が成果をもたらしている[7]。しかしながら、前述のキムの論考に挿絵そのものが添えられていないことや、ほかの研究も東アジア遠征や日露戦争など特定の出来事だけに光を当てたものが多く、掲載される挿絵が時代とともにどのように変化したかは明らかになっていない[8]。加えて、日本に対する認識はもっぱら日本を描いた挿絵だけからその本質を読み取ることができるのであろうか。たとえば、当時の日本は中国との対比のなかでイメージづけられていたはずであり、挿絵で

描かれた中国像を同時に検討の対象に含める必要があろう。
以上のような先行研究が抱える課題を踏まえて、本稿では出来事ベースではなく、一八六〇年代から一九世紀終わりまでの比較的長いスパンを設定し、絵入り新聞の東アジア像が変化する過程を通時的に跡づけてみたい。具体的な史料としては、ドイツ語圏における挿絵入り新聞のパイオニアでありながら、これまで先行研究で用いられることが少なかった『ライプツィヒ絵入り新聞』を取り上げる。また、本稿ではイメージの形成だけでなく、それが実際の行動とどのように絡み合っていたかを問うことで、近代化過程の他者認識のなかに含まれる自己認識も併せて考えてみたい。

一 『ライプツィヒ絵入り新聞』に描かれた海軍の近代化

(一) 絵入り新聞の流行と『ライプツィヒ絵入り新聞』

一八四〇年代、ヨーロッパは「絵入り新聞の時代」を迎えたといわれている。木版画技法の進歩や印刷の高速化といった技術革新により、書籍だけでなく定期刊行の新聞や雑誌にも挿絵が導入され始めたのである。その嚆矢となったのが、イギリスの『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ（The Illustrated London News：一八四二年創刊）』とフランスの『イリュストラシオン（L'illustration：一八四三年創刊）』であった。挿絵入り新聞の流行は他国にも広がり、ドイツ語圏では『ライプツィヒ絵入り新聞（Leipziger Illustrirte Zeitung）』が一八四三年七月に創刊された。週刊新聞である同紙の発行部数は、わずか数年で一万部まで達している。当時の講読形態と価格面から見てもこれは驚異的な部数であり、ドイツ語圏を代表する絵入り新聞として同紙は確かな地位を確立したのである。(9)

『ライプツィヒ絵入り新聞』の成功の秘訣は、同紙が単なるエリート層の新聞ではなく「家庭雑誌」として自らを位置づけていた点にある。つまり、成人男子だけでなく女性や青少年層も対象とした紙面作りが試みられ、小説、物語、モード、クイズ、チェスなどの欄が設けられていた。特に、ファッションやモードの紹介に際して挿絵が持つ効果は絶大であり、定期刊行の利点をいかして常に最新の流行が具象的に紹介された。また、こうした娯楽性だけでなく、同紙の強みは教養紙という側面にもあった。知識と教養に飢えた市民層の欲求を踏まえ、『ライプツィヒ絵入り新聞』は各所から入手した挿絵を添えてさまざまなニュースや知識を紙面に盛り込んだ。たとえば、公人や偉人の姿、行事の様子、自然の風景や動植物、科学技術の成果など、挿絵があることで読者の想像力は刺激され、物事に対する理解は大いに深まったことであろう。

実際、挿絵が持つこうした魅力を『ライプツィヒ絵入り新聞』は自ら強く打ち出していた。つまり、「日常の出来事にも具象的な解説を添え、絵と言葉の融合によって現在をはっき

りと目に見える形で浮かび上がらせる」[10]、これこそが同紙に与えられた使命であると創刊号で明示されていた。さらに続けて以下のように高尚な理念が謳われている。

たとえ完全に周知の世界の出来事であっても、王侯の偉業から人目につかない場所での研究の成果に至るまで、一般の関心に供するものでありさえすれば、我々は読者諸氏に週間ニュースの形態でそれを提供するつもりであり、この具象的な描写からより正確な理解ないし生き生きとした印象をもたらす上で必要なものを、できるだけ忠実に、かつ入念に作成された木版画を用いて、読者諸氏の目の前にもたらす予定である。[11]

新聞がビジュアル的であるのは当たり前で、映画やテレビ、カラー雑誌やインターネットなどさまざまな視覚媒体が並存している現代とは異なり、当時の大多数の人々は送られてくるニュースを活字主体で理解しなければならなかった。多くの書籍を購読し思考やイメージをめぐらせることに日頃から慣れ、高価な挿絵入り書籍でそれを補うことができたのは、当時まだ一部の教養市民層に限られていた。また、この時代は科学が急速に発達し、これまで思いもしなかったような新発見、新技術が次々と生まれ、そのうえ西洋人が世界中へ進出する過程で未知の世界の情報が続々と押し寄せた。挿絵入り新聞の登場は、国内やヨーロッパ、あるいは全世界から送られてくる日常的な情報に具象的なイメージを付与し、庶民が世の中を知るうえで大きな助けとなった。そして同時に、人々の認識や観念が操作を受ける余地も広がり、人々は「考える」よりも「感じる」ことに次第に慣らされていくのである。

（二）ドイツ海軍の近代化

では、一九世紀半ばに誕生した『ライプツィヒ絵入り新聞』は、急速に進むドイツの近代化をどのように映し出していたのであろうか。近代化の事物は数限りないが、産業発展の目に見える成果としては、たとえば蒸気機関、洗練された鉄製品、電気設備、大型砲などが挙げられる。そして、これらの先端技術を結集し巨大な威容を誇った軍艦こそ、近代化の実像を映し出す象徴の一つであった。国家の近代化の度合いは、この巨艦をいくつ自力でそろえられるかで測られていくのである。

ドイツにおける海軍近代化の始まりは、絵入り新聞の誕生と時期的に重なる。一八四八年、革命下のドイツ諸邦はデンマークとの戦争に踏み切るが、脆弱な海軍力ゆえ敵の海上封鎖を許してしまう。そこでドイツ国民議会は艦隊の整備に着手し、新しい統一国家のシンボルとなる複数の軍艦を外国から調達した。ドイツ・ナショナリズムの結晶たるこの艦隊は、革命の終焉とともにわずか数年で消滅したが、プロイセンを中心に近代海軍の建設をめざす動きが停止することはなかっ

た。ただ、それ以降のプロイセン・ドイツ海軍の発展は緩慢なものとなり、ビスマルクのもと抑制的な軍備拡張が続いた[12]。

それゆえ、通常ドイツ海軍のターニングポイントはビスマルク退陣後の一八九〇年代と見られている。つまり、海軍への強い愛好を持った皇帝ヴィルヘルム二世の登場が重大な分岐点になったという見方である。海軍長官に任命されたティルピッツは、一八九八年と一九〇〇年に艦隊法を成立させ戦艦を主体とする大海軍の建設に舵を切った。このいわゆる「ティルピッツ・プラン」により、イギリスとの間で熾烈な建艦競争が生じ、海軍問題は一組織の利害を越えドイツの対外関係そのものに深刻な影響を与えることになった[13]。

しかし「海軍の近代化」という点で見た場合、ドイツ海軍の画期はこの一八九〇年代ではなく、実のところそれよりも早い一八七〇年代にあったのではないか。確かに、一八九〇年代末に始まる政策転換は、海軍の存在意義を変えるほどの決定的な重要性を持っていた。しかしながら、そもそも大拡張の前提となる土台がすでに備わっていたからこそ、艦隊法成立からわずか一〇年程度でドイツは世界第二位の海軍大国へ飛躍できたと考えられる。いうなれば、一八七〇年代に実施された一連の改革こそがドイツ海軍の近代化を語るうえで鍵となるのである。

では、一八七〇年代の海軍近代化とは何か。この時期のドイツ海軍は、特に三つの側面でそれまでの時代とは異なる新たな段階へ踏み出していた。

第一に、海軍の機構面での改編が挙げられる。プロイセン時代、海軍は陸軍に従属する軍事組織であったが、ドイツ帝国の建国とともに皇帝と宰相に直属する「海軍本部（Kaiserliche Admiralität）」が設置され、陸軍から正式に独立を果たすことになる。初代本部長のアルブレヒト・フォン・シュトシュ（在職：一八七二―一八八三年）は、陸軍出身の将軍であったものの、彼には軍政・軍令面で強い権限が与えられ、その指導力のもと海軍は名実ともに国制上の独立した組織となる。彼の退任以降も、海軍が再び陸軍の影響下へ逆戻りすることはなかったため、海軍制度上の近代化は一八七〇年代に達成されたと見ることができる。

第二に、一八七〇年代に進んだ建艦技術の発展に近代化の真価を見ることができる。ドイツ帝国の建国以前、プロイセンは軍艦の入手をイギリスやフランスからの購入に依存していた。やがて一八七〇年代に入ると、ドイツは主力となる大型艦の国産化を進め、各地の造船所で最新鋭の装甲フリゲート艦が次々と建造される。具体的には、ヴルカーン造船所の「プロイセン」（一八七三年進水）、ヴィルヘルムスハーフェン海軍工廠の「グローセ・クアフュルスト」（一八七五年進水）、そしてキール海軍工廠で建造された「フリードリヒ・デア・グローセ」（一八七四年進水）などである。とはいえ、装甲板の製造においてはイギリスへの依存がなおも続いた。それゆえ、搭載砲とともにクルップ社がその国産化へ向けた動き

を本格化させていく。こうして、主力艦の国内建造に目途が立ったことにより、ドイツ初の本格的な建艦計画が一八七三年に策定された。確かに、整備規模は依然として他の大国に劣るものであったが、一〇年の長期プランに立った艦隊建設が始まり、この流れのなかで建艦技術は確実に向上するのであった。

海軍近代化に向けた第三の動きは、人材育成の面でも展開していた。一八七〇年代、ドイツ海軍では体系的な将兵養成制度が確立され、たとえば一八七二年に将校の高等教育機関である海軍アカデミーが開設された。また、実地での訓練を積むため軍艦の遠洋航海が定期的に実施され、海軍の未来を担うマンパワーの向上が図られた。注目すべきは、この繰り返される遠洋での航海演習が海外在住ドイツ人の保護任務を兼ねたことで、海軍に対する国民の好感度が上昇した点である。それまでは陸軍に付属する沿岸防衛の一部隊として軽視されていた海軍が、海外貿易と国家の発展を支える守護者として存在感を高めていくのである。海軍の大増強を後押しした二〇世紀初頭の熱狂は、一八七〇年代の海軍に対するイメージの転換を基礎とするものであり、ティルピッツのプロパガンダ工作が浸透する土壌は、彼が登場する以前から長い年月をかけて整えられていたといえる。[14]

では、一八七〇年代に近代化の道を進むドイツ海軍は、『ライプツィヒ絵入り新聞』の紙面でどのように描かれていたのであろうか。まず、陸軍からの独立をめぐっては、初代海軍本部長シュトシュの肖像とともに新たな時代の到来が詳説されている。[15] さらに装甲艦国産化の進展については、各地での建造ラッシュの様子が挿絵とともに報じられている[16]（図1）。特に、それら軍艦を描いた挿絵の多くが、紙面の一面全体ないしは二面をすべて使った巨大絵であることから、そのスケールの大きさをできるだけ紙面で再現しようとする編集者の意思が伝わってくる。また、単に軍艦だけでなくそれらを建造した海軍工廠、そして完成した軍艦が駐屯する軍港についても、同紙は地図を添えて敷地内の細かい設備を紹介している。[17] さらに近代化が人材育成の面でも進んでいたことを『ライプツィヒ絵入り新聞』は着実に見定めていた。つまり、日々の操練に励む軍艦乗組員の姿が紙面に描かれ、その激務の様子が読者に伝えられるのであった。[18]

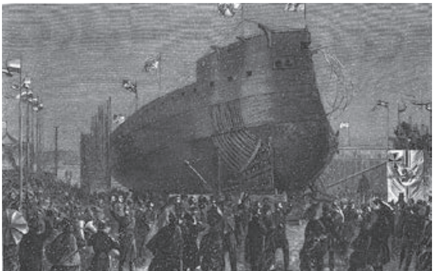


図 1

さらにこの時代の海軍報道に顕著なのが、外洋へ向かう艦隊の描写である。ドイツ海軍は、国家の威信誇示と居留民保護の対象を広げるべく、一八七〇年代に軍艦を内戦下のスペイン、アメリカ大陸、太平洋などへ送り込んでいた。その情

景は『ライプツィヒ絵入り新聞』でも挿絵つきで取り上げられ、ドイツ海軍が世界各地で活躍する様子が報じられている[19](図2)。前述のように、一八七〇年代から定例化したこれらの在外派遣は、海軍の人材育成、通商保護、世論工作の目的を併せ持ち、平時における海軍の活動の柱であった。そのなかでも海軍の重要な派遣対象地となりつつあったのが、長距離航海の機会を与え巨大市場開拓の可能性をはらむ東アジアであった。

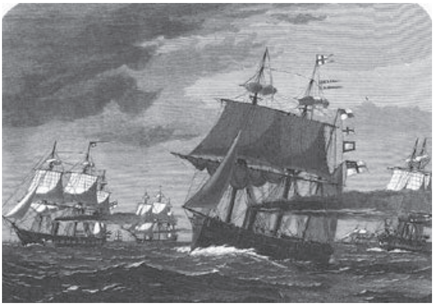


図２

二　一九世紀後半の東アジアに対するまなざし

(一) 中国と日本に対するまなざし

一九世紀半ば、アヘン戦争とペリー来航に続く東アジアの政治的変動は、この地域に対するヨーロッパ人の関心を高め、諸国はこぞって中国や日本との関係構築に動き出した。その過程で外国人の流入制限が緩和されていくと、東アジアへ渡るヨーロッパ人の数は増え、一方でさまざまな情報が祖国にもたらされた。こうして、ユーラシア大陸の反対側に位置する異世界が徐々に輪郭を現し、商業的な可能性や文化的な好奇心が絡み合って人々の想像力を刺激し始めるのであった。

もちろん、いまだ統一国家を持たないドイツ諸邦といえども、こうしたグローバル化の流れに取り残されていたわけではない。ハンブルクやブレーメンなどハンザ商人の動きは、すでに早い時期からアジア太平洋においても活発であり、それに押される形でプロイセンは外交使節団を現地へ派遣した。艦隊にエスコートされたオイレンブルク使節団は、日本、中国、タイとの条約締結に成功し、ドイツが東アジアに参入する橋頭保を築いたのである。

プロイセンの東アジア遠征が有した政治的、経済的な意義に関しては、すでに多くの研究で明らかにされている[20]。しかし忘れてはならないのは、この遠征が文化的な側面でも重要な意味を持ったという点である。つまり、遠征隊の参加者たちが記した公式遠征記や旅行記は、広くドイツ語圏で読み継がれ、付せられた挿絵の効果もあって東アジア像の形成過程に重要な影響を与えた[21]。加えて、遠征時に隊員が持ち帰った膨大な物品がドイツ各所で人目にさらされたことで、東洋趣味が王侯貴族や商人だけでなく一般市民にも浸透する契機となった[22]。こうした刊行物と収集品を介した東アジア・イメージの形成は、それ以降も押し寄せる情報とモノを通して強化されていくのであった。

また、ドイツ語圏のもう一つの大国であるオーストリアも、

プロイセンから約一〇年遅れて遠征隊を東アジアへ送り、戦争の続発で内向きになっていたドイツ語圏の目を再びこの地へ向けさせた(23)。さらに、東アジアの魅力を人々に強く印象づけたのが、一八七三年にウィーンで開催された中欧初の万国博覧会であった。この万博は、日本政府が初めて公式参加したという経緯もあり、国家の総力を挙げた出品が人々の好奇心を刺激した。もちろん、当時は中国文化に対する関心も依然高かったが、ヨーロッパにおける東洋趣味の重心は、この頃シノワズリーからジャポニスムへ移りつつあった(24)。

では、ドイツ語圏が東アジアとの結びつきを強め始める一九世紀半ば以降、代表的な挿絵メディアであった『ライプツィヒ絵入り新聞』は中国や日本をどのように描いていたのであろうか。紙面に掲載された記事と挿絵を手がかりにその傾向を探ってみよう。

まず中国に関しては、万里の長城や各都市の様子などの風景画、皇帝の婚礼、商業問題、西洋医療の移入、メディア事情、清仏戦争の戦争画、中国の工芸品などが挿絵入りで掲載されている(25)。とりわけこの時代に目立つのが、中国に対するネガティブなイメージを想起させる記事である。たとえば、沿岸部における海賊の横行、纏足など伝統的な社会慣習、理不尽な審問と刑罰の方式、厳しい検閲、汚職、アヘンの常習、魔術的な衛生処置、死者に対する悪霊払いの愚行、悪臭とゴミまみれで物乞いがあふれる都市、乱雑で喧騒に包まれたアメリカ西海岸の移民社会など、挿絵がある分より臨場感を増して中国の難点が伝えられる(26)（図3）。ただ、そうした近代化の後れも、分野によっては徐々に改善へ向かっていることも触れられている。具体的には、外国公使団の中国皇帝に対する謁見方法が屈辱的でない様式に改められた

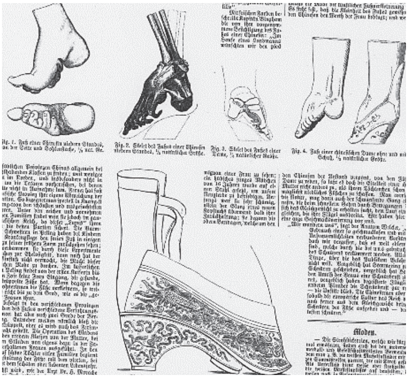


図３

ニュース、軍隊の西洋化などが紹介されている[27]（図４）。

特に同紙は、この西洋式の「新軍」建設にドイツが関与している事実を引き、貿易や軍事の領域でのいっそうの進出に期待を示している。しかしそのためには、中国事情をより詳しく知る必要性があり、『フェルディナント・ヒルト地理図版』の挿絵とテクストを参照しながら、以下のような心の準備が説かれる。

ドイツ人にとって世界的使命を果たす偉大な新時代が近づきつつある。ゲルマニア抜きの神の救済はない！先見の明があるイギリス人の階層はそう語る。地球上の諸民族のもとで果たすべき文化的使命をドイツ国民に理解させるためには、地球と諸民族そのものについて可能な限り知ることがまず何よりも必要になる[28]。

一方、日本に向けてはこのような強い帝国主義的な視線は注がれていない。『ライプツィヒ絵入り新聞』に日本が頻繁に登場する端緒は、プロイセンの東アジア遠征と条約の調印をめぐる報道であった[29]。以後、日本関連の記事は、日清戦争に至るまで掲載数の点で中国記事よりも多くなる。たとえば、江戸や横浜などの街並み、台風や地震といった自然災害、日本で生息する鳥類の紹介がしばしば挿絵入りで取り上げられた[30]。加えて顕著なのは、日本の文化や日常に対する関心の強さである。なかでも、日本の宗教をテーマにした記事が目立ち、地蔵信仰、墓地や読経の光景、遍路や祭りなどの様子が掲載され、仏教と神道を問わず日本人の信仰や祭事が挿絵入りで詳しく解説されている[31]（図５）。ほかにも、

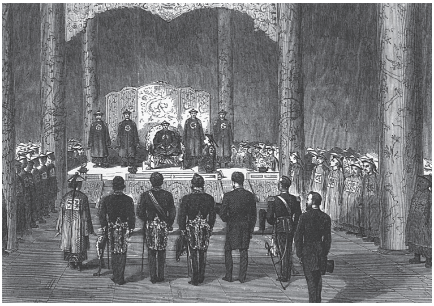


図４

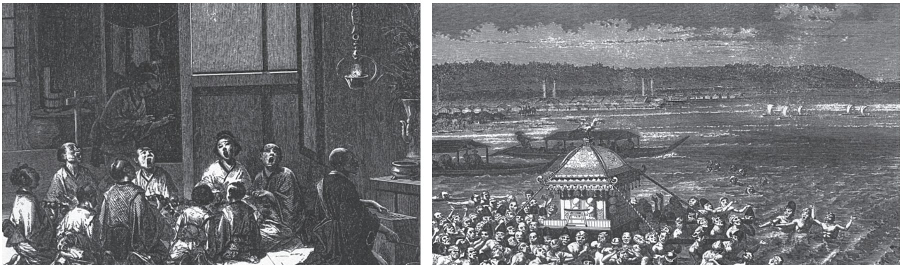


図５

建築、剣術の稽古、家屋内の暮らし、魚売りの行商と食文化、飲酒文化、養蚕業の事情が視覚的に伝えられ、日本文化の基本知識が読者に提供されている[32]（図6）。また、そこには日本人の楽しげな日常も映し出され、演劇鑑賞、正月祭りの様子、将棋、囲碁、百人一首、かるた等の伝統的な遊戯に好奇の目が向けられた[33]（図7）。変わったところでは、日本庭園に見られる庭師の芸当や凧揚げの職人芸、火消しの曲芸など日本人の器用さが称賛され、そうした匠の技を体現した伝統工芸品も紙面を飾った[34]（図8）。

日本報道でもう一つ忘れてはならないのが、『ライプツィヒ絵入り新聞』の万博関連記事である。ドイツ語圏の代表的な挿絵入り新聞である同紙は、ウィーン万博における日本の

図６

図７

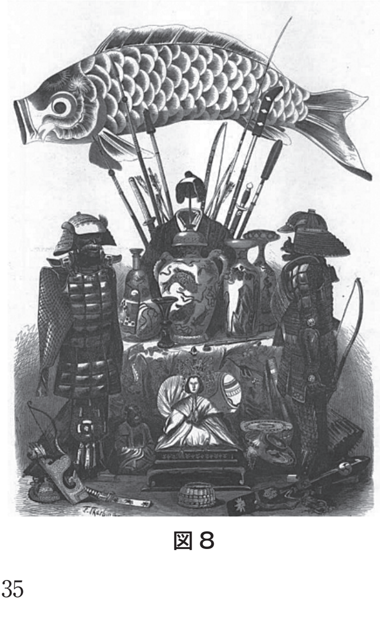


図８

出品や日本人の姿を熱心に報じている。同紙の報道によれば、「芸術と工芸の平和的な競争の舞台で最大の注目を浴びているのは、議論の余地なくまさに極東からやって来た日本人である」[35]とされ、その言葉通り日本館の記事は他のアジア諸国のパビリオンに関する記事よりも多い[36]（図９）。おそらくは、万博会場を訪問できなかった市民も、エキゾティックで物珍しい日本文化を同紙の挿絵を通じて疑似体験できたであろう。同様に、パリなど欧米各地で開催された万国博覧会の日本館も同紙では折に触れて紹介され、ヨーロッパにおけるジャポニスムと万博の関係性がそこに体現されていた[37]。

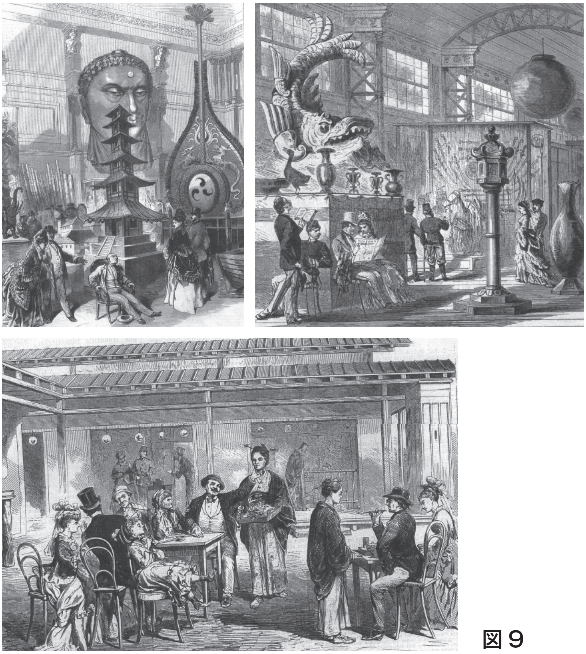


図９

『ライプツィヒ絵入り新聞』に描かれたのは日本の伝統文化だけではない。この国に押し寄せる西洋化の波にも同紙の関心は向けられていた。たとえば、西洋式の教育が大学南校や東京帝国大学で推進される様子が伝えられ、そうした学問教育にドイツが深く関与していることが誇示された[38]。しかしながら、同紙は日本の近代化を手放しで賛美していたわけではなかった。つまり、鎖国時代に育まれた独自の伝統文化が消えゆく現状への悲嘆もそこには見え隠れしていた[39]。日本文化の独自性こそが価値あるものという同紙の認識は、以下の文章からも読み取ることができる。

> アンペール［駐日スイス公使―筆者注］の著作を手がかりに日本民族の本質に近づこうと試みれば試みるほど、ますますそれが多くの点で我々と同等なものであることに気づくことになる。日本は完全な意味での文化国家なのである。しかし、そこで発展した文化は我々のものとは異なり、ヨーロッパの基準で評価してはならない完全に独自なものなのである[40]。

このように、一九世紀後半の『ライプツィヒ絵入り新聞』のなかで日本は文化段階の高い国としてイメージされ、その固有の性質に高い関心が向けられている。だからこそ、西洋に

倣った近代化の努力を肯定しながらも、失われる伝統と個性を悲しむ複雑な心情が働いていたといえる。[41] それはまさに、近代化を邁進しながら伝統文化を喪失していく自国の現状がそこに重ねられていたのかもしれない。

（二）日本と中国を対比する眼

これまで述べてきた近代ドイツの日本像は、一九世紀中葉の開国後に突如として形成されたものではない。もちろん、この時代から大量の情報が次々とヨーロッパに飛び込んだのは確かだが、すでにヨーロッパ人はケンペルやシーボルトの目を通して断片的ながらも日本を知っていた。彼ら先達の著作では、専制や抑圧的な体制に批判は向けられるものの、おおむね日本の社会や文化に対してポジティヴな描き方がなされていた。こうした土台のもとに、一九世紀後半のジャポニスムは花開き、文化や生活の細部に至るまでが好奇心の対象となったのである。日本文化に対する関心は、各地で開かれる展示会や博覧会を通じて広がり、特にその工芸品や原風景、侍や芸者などが高い関心を呼んだ。こうしたジャポニスムは、大衆向けの読み物を介してさらに拡散し、特に挿絵入りの刊行物が日本の特異性や神秘性を際立たせるうえで果たした役割は小さくない。[42]

しかしもう一つ見落としてはならないのが、東アジアの大国である中国との対比により、日本のイメージと評価が相対的に高く引き上げられていたという点である。つまり、「近代化の優等生たる日本」と「近代化に背を向ける中国」という対称性を持つ二つのアジア民族を仕立て、「近代化（＝西洋化）」という指標をもとに日本は中国よりも好感を持てる対象として眺められていたのである。

最近外に向けて国を開いた極東の両国、すなわち日本と中国は、その開国以来まったく異なる歩みを続けている。日本はヨーロッパの文化へ不思議なほどの速さで順応し、単に外面的な関係だけでなく内面的な点でもまぎれもない急激な変化を遂げた。それに対して中国は自身の古い慣例を忠実に守り、変化したものといえば、せいぜいのところ兵士が手にする武器や沿岸部の要塞といった類のものであり、彼らにとって外国との交際はできるだけ早く振り払わらなければならないくびきとしか思われていない。[43]

こうした見立てのなかには、自分たちがいままさに邁進する近代化への絶対的な確信が内在していた。近代化というグローバル時代のさだめに抗う中国は、長い歴史と高度な文化にも関わらず、こうして東アジアの覇者の座から引きずり降ろされることになった。『ライプツィヒ絵入り新聞』の表現を借りると、水のごとく至る所へ自然と染み渡るヨーロッパの文化は、かつてケープ以東で最も豊かであった中国にも例外なく流れ込もうとしていた。しかしながら、隣国の日本と

は対照的に中国はその流れに抵抗し、貿易を開くだけでも二度の戦争が必要となった[44]。それだけに、変化を厭わず近代化に進む日本の姿勢はヨーロッパ人の共感を引き寄せ、文化や伝統に対する関心と相まって好意的な日本像が作り出されていくのであった。

中国よりもはるかに欧米で関心を持たれているもう一つの東アジアの民族がいる。自身の古い文明に新たな要素を接ぎ木している日本は、西洋の文化的発展に追いつこうとする努力によって我々の深い共感を得ている[45]。

ただし、『ライプツィヒ絵入り新聞』が中国そのものに「落伍者」のレッテルを貼っていたわけではないことにも注意しなければならない。そのことは、同紙の次のような論説からうかがい知ることができる。

中国人は少なく見積もっても三億人を有する巨大で強い民族であるだけでなく、向学心があり勤勉かつ聡明で偏見にとらわれない有能な民族でもある。卓越した兵士をも供給するそのような民族は、きわめて強力な国家になるための原料を有する。しかし、北京の宮廷は衰退に包まれ行政は弱体化している。この階層に改善がもたらされたならば、中国はめざましい飛躍を遂げられるであろう[46]。

中国人が文化的に高く発展し、我々が考えるところの近代的で自由主義的な教育に対応する能力があることは誰も疑わないであろう。それはまた、東アジアにおけるヨーロッパ人の居留地、ならびに上海、天津、バンコク、厦門など中国人がヨーロッパ人と一緒に暮らすあらゆるところでも十分に示されている。ただ、腐敗した役人を抱え硬直し老朽化した満州政府が、国民の教育のため、巨大な帝国の無尽蔵の富を開発するため、そして交通手段の整備のために何もしないのである[47]。

つまり、陋習にしがみつき自滅に向かう満州族の王朝と、高い潜在力を持つ中国民衆がそこでは慎重に区別されている。満州王朝が進歩に抵抗することで、「中国は迷信と隷従の砦にとどまっている[48]」と同紙は中国の現状を解釈していた。それゆえ、強靭で有能な民族を抱える中国は、統治者が西洋に倣って近代化に踏み出すことで「強力な国家」となり、「めざましい飛躍を遂げられる」と考えられたのである。そうした見方の根底には、この地が貿易上の利益を生む市場に変わることを望む心情が働いていたことはいうまでもない[49]。

いずれにせよ、挿絵入り定期刊行物に上記のような「差異の観念」が埋め込まれていたことは東田の指摘する通りである[50]。しかしそれは、単に「文明」と「野蛮」の違いだけでなかった。そうした世界観は、非西洋における国家同士の間にも差異を作り出し、さらには一つの非西洋国家の内側にも差

異を描き込む多層的なものであったのである。

　日本が中国よりも西洋の共感を得た理由は、こうした近代化の意欲だけにとどまらないであろう。日本の文化状態を「高く」見積もる指標の一つに、日本人女性の魅力と置かれた境遇があった。この時代、イギリスやフランスの絵入り新聞では日本人女性の挿絵が多く登場していたが、『ライプツィヒ絵入り新聞』にも同様の傾向が見られ、日本人女性に対する評価は総じて高く好意的であった（図10）。

　日本人女性はたいてい可愛らしい。しかし彼女たちの真の魅力は、従順さ、穏やかさ、優美さ、慎み深さである。[51]

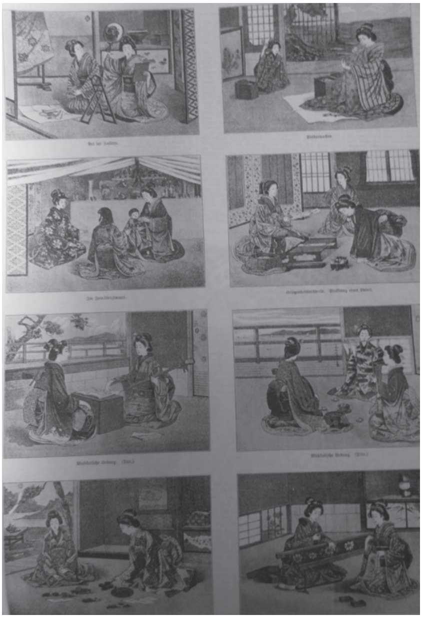


図 10

日本人女性は、他のたいていのアジア諸国のような低い地位に置かれておらず、この一事だけでも優れた民族であることを物語っている。[52]

　そこから分かることは、女性の内面や振る舞い、社会で置かれた境遇といったものが、民族の優劣を決める重要なものさしとなっていた点である。たとえば、日本に次いで西洋の影響を強く受けるアジアの国として、『ライプツィヒ絵入り新聞』はタイを取り上げているが、その文化の状態を女性への敬意という面から以下のように評している。

　文化の階層のなかでシャムが低い位置にいることは女性への敬意が低いことに表れている。女性が男性の奴隷ではないにしても、男性は女性を売ったり借金の担保にしたりすることを許されている。外国人の前では、彼女たちは男性や来客に対し手足で這うように接待する。たとえ高位の者たちのなかで女性への敬意が高まりそのような奇形なことは見られないにしても、依然として一夫多妻制が支配的である。[53]

同じことは、纏足の悪習や女性の劣悪な処遇の原因を「文化の階層」に帰した中国の評価に対してもいえる。確かに、一九世紀後半の日本も女性の地位は依然低いままではあったが、それでもこれら他のアジア諸国と比較されるなかで、相

対的に文明度が高く西洋に近い国と位置づけられたのであった。さらに、女性を取り巻く近代化の波が日本に押し寄せる状況は、『ライプツィヒ絵入り新聞』の次の記事にも明瞭に表れていた。

日本女性の次の世代は多くの点でこれまでの世代とかなり異なったものとなるであろう。若い女性は地理学、歴史学、近代音楽、外国語、政治学、ひょっとすると国民経済学に通じるようになり、「社会」で行動するすべを知り、西洋文化によりかなりの磨きがかけられ、前の世代の女性たちが行っていた伝統的な家事にすぐに耐えられなくなり、結婚相手の選択にも決定的な影響を与えたいと思うようになるであろう。ある点において、つまり身なりの問題においてその移行段階はすでにかなりの進行を見せている。(54)

以上のように、『ライプツィヒ絵入り新聞』の東アジア報道は、一八九〇年代の半ばに至るまでおおむね日本と中国を中心に展開していた。時折、タイの記事やごくわずかに朝鮮やインドシナの紹介が掲載されることはあっても、この地域に対する同紙の関心はもっぱら日本と中国に向いていた。(55)また記事内容を見ても、そこにさまざまな価値づけや評価が潜んでおり、特に日本の自然、文化、社会への高い関心と共感が読み取れた。

その一方で、東アジアの政治的な変動に関する報道は、イギリスの絵入り新聞などに比べ掲載頻度ははるかに少なかった。イギリスは、一九世紀中葉の東アジア情勢に自ら深く関わった過去を持ち、現地の最新ニュースに対する需要は早くから国内に根づいていた。(56)それに対し『ライプツィヒ絵入り新聞』は、記者と画家を兼ねた現地特派員を欠き、東アジアの戦争や内戦、最新の政治ニュースをさほど取り上げていない。それはひとえに、ドイツの東アジアに向けた進出が緩慢であったことに起因したといっていいだろう。やがて近代化の進展により自信をつけたドイツは、一九世紀末にそれまでの政策を転換し、かつてのイギリスがたどった道を後追いするかのように東アジアへと猛進した。『ライプツィヒ絵入り新聞』には、新たに進化した挿絵技術の力でその様子が克明に映し出されていた。

三　世紀転換期におけるまなざしの変化

(一) 日清戦争の描写

ドイツの東アジアに対する姿勢は、一八九〇年代の初めまで穏健かつ慎重であったといわれている。それを一変させたのは、前述のようにビスマルクからヴィルヘルム二世への政策主導者の交代であった。ただし、その直接的な引き金を引いたものは何かと問うたとき、その答えは日清戦争の勃発にあったといえよう。これ以降、ドイツの東アジア政策は強硬

かつ積極的な性格を帯びるようになるからである。[57]

東アジアにおける地域大国間のこの戦争は、政府のレベルだけでなく、欧米市民層の関心をも強く引き寄せていた。『ライプツィヒ絵入り新聞』にはそれを示唆する文言が以下のように並んでいた。

> 中国と日本の間で朝鮮紛争が勃発したことで、全世界の目はこの極東の蒙古系両帝国へ新たに向いた。それゆえ、多くの読者が両国の状況についていろいろ知りたいと興味を抱くことは確かであろう。[58]

> 予期していたよりも早く、東方の強力な文化国家同士の競争が極東における戦争へと至ったのであるが、それはアジアのずっと後方で起こっている戦争ではあるものの、ヨーロッパ諸国にとってはさまざまな理由から高い関心を呼んでいる。[59]

> 極東におけるヨーロッパ諸国の多様な利害に鑑みて、日中間の戦争の経過は軽んじることのできない意義を有する。[60]

> 最近、あらゆるヨーロッパの大国では、内政や外交の領域で変化に富んだ重要な出来事が次々と起き、人々の関心がそこに向かっているにもかかわらず、遠い土地のある出来事が熱狂と興奮のうちにヨーロッパの関心を自らに引き寄せている。日清戦争である。[61]

このように、日清戦争に対し「ヨーロッパ」の関心が高まっていることを『ライプツィヒ絵入り新聞』は繰り返し言及しているが、そこからドイツ語圏の読者に向けたメッセージが読み取れる。つまり、「ヨーロッパ」の一大国に成長したドイツは、これまでのような東アジア政治への無関心はもはや許されず、現地で起こる出来事を注視し行動する必要性があることを同紙は訴えたかったのではないか。前述のように、一八九〇年代初めまで『ライプツィヒ絵入り新聞』自身も東アジアの政治や戦争に対してさほど強い関心を示していなかった。しかし、この日清戦争の勃発を境にその姿勢は一変し、同紙は東アジアの政治情勢を強く意識した論調を展開し始めるのであった。

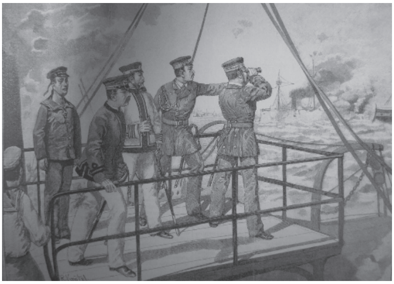
ただ、前の時代と変わらず一貫している態度も見られた。それは日本に対する共感と高い評価である。そうしたスタンスは、戦争の経過を通してさらに強まったように思われる。

> ヨーロッパが作り上げた武器を手に、日本が近代化した文化諸民族のサークルに属することを示すことになろう。［中略］一般的に、ヨーロッパは自身の生徒である日本に共感を抱き、軍事行動で優位に立つことを期待している。[62]

紙面では、西洋式に整えられた日本軍の医療体制、自転車部隊の活躍、敵兵への手厚い看護と埋葬が絵入りで称賛されていた[63](図11)。さらに海軍に対しても、日本は戦力の面で中国に劣るものの、実力という点では優位に立つことが早くから予期されていた[64]。実際、中国の水雷艇が日本艦隊から逃げ回る様子を「犬に追われる野うさぎ」にたとえ、その歴然とした差が挿絵で表現されている[65](図12)

このように、『ライプツィヒ絵入り新聞』では近代化した日本軍と旧態依然の中国軍が対比され、それは図像の力で読者に印象づけられている(図13)。つまり、一九世紀末になると、イラストだけでなく写真から原版を作成した図版が記事に添えられるようになり、絵入り新聞が持つリアリティとインパクトは飛躍的に増したのである。たとえば、両

図 11



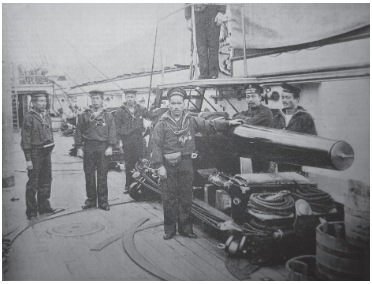


図 12

図 13

国の兵士を一枚の図像のなかに映した図14を見てほしい。そこに付せられた解説では、小さいながらも力強い態度の日本兵が、ドイツに似て卓越した印象を与える軍服の着こなしである一方、中国兵捕虜は軍人らしく見えない身なりと無気力な態度が著しいと断じられている。視覚の効果を十分に認識している同紙は、「なんと鮮やかに両国の違いがこの絵に表れていることか！」[66]と一枚の図像が持つインパクトの大きさを示唆している。

図 14

さらに日清戦争の報道で特徴的なのが、そこにドイツ自身が映り込んでいることである。上述のように、『ライプツィヒ絵入り新聞』は日本軍を絶賛し、「日清戦争が勃発した際、この遠方の島国がヨーロッパ流の教育を施され現代の要請に完全に対応した軍を持っていたことを知り世界は驚いたのである」[67]と語っていた。同紙は、彼らに規律や戦争術の教育を施した師が自国であることを持ち出して、「我々ドイツ人がその手本となっていることを誇りに思ってよい！」[68]と自賛していた。また、旅順要塞の構築にドイツ人が関与した過去を引いて、やはりこの戦争とドイツが無関係でないことを示している[69]。

そうした間接的な映り込みだけでなく、日清戦争の現場に「ドイツ」の姿が直接入り込む様子も紙面には描写されていた。これこそ、新しい時代の到来を予感させる一面であった。つまり、一九世紀の半ば以来、東アジアで暮らすドイツ人やその獲得権益は増大の一途をたどっており、日本と中国の戦争は彼らの生命や財産に危害を及ぼしかねない事態であった。そこで在外同胞を守る海軍の役割に再び注目が集まり、現地に派遣される軍艦の姿が繰り返し絵入り新聞に登場することになる(図15)。

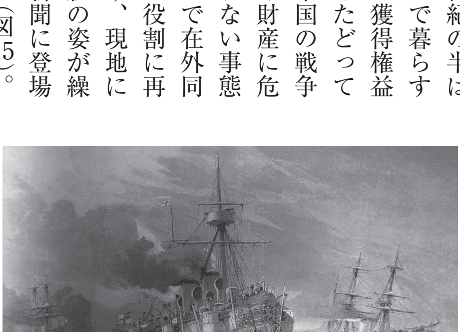


図 15

特に中国に居住する自国民の生命と財産は、我々の感覚では半文明状態の民族のもとにあり、その狂信的な大衆によって絶滅させられる絶え間ない危機に置かれてい

> る。それゆえ、軍事力による速やかな介入がいずれにせよあちらこちらで差し迫って必要となるのである。[70]

そこに見られるように、『ライプツィヒ絵入り新聞』はドイツ海軍の東アジア増派を説いていたのであるが、背景には、日清戦争の勃発時にドイツの現地部隊がわずか砲艦二隻（兵員一七〇名）にすぎなかった事実があった。同紙は、「東アジアの紛争が我々の悪しき倹約姿勢を後悔させることにならないよう望む[71]」と語り、ドイツ政府の節約志向が招いた軍事プレゼンスの脆弱さを暗に批判したのである。

　このような世論の圧力もあり、日清戦争の勃発後にドイツ政府は東アジアの駐留艦隊を増強し、装甲艦一隻、巡洋艦五隻、砲艦一隻の計七隻（兵員二一五五名）にまで戦力は膨らんだ。そこには、二等装甲艦「カイザー」や二等巡洋艦「プリンツェス・ヴィルヘルム」といった大型の軍艦も含まれていた。こうして新たに創設された東アジア巡洋分艦隊は、「東アジアに集結した他の列強の堂々たる艦隊に混じっても、これまでのようにシンデレラなどと見られるようなことはもはやない[72]」とされ、ドイツの軍事的伸張が列強に追いついたことを『ライプツィヒ絵入り新聞』は歓迎していた。

　以上のように、日清戦争はドイツ人の目を東アジアに引きつけ、この地で暮らす同胞や在外権益をいかに保護するか課題を突きつけることになった。そこで導かれた答えこそ、ドイツの国力の投影に最も効果的であり、かつ近代化の成果たる大型軍艦を東アジアに多数並べることであった。絵入り新聞はそうした艦隊の姿を盛んに紙面へ映し出し、ドイツが東アジアの表舞台に立った事実を読者に誇らしく伝えた（図16）。ただ、そこにはもう一つ欠けている絵図があった。近代化のステータスシンボルである「海外植民地」である。

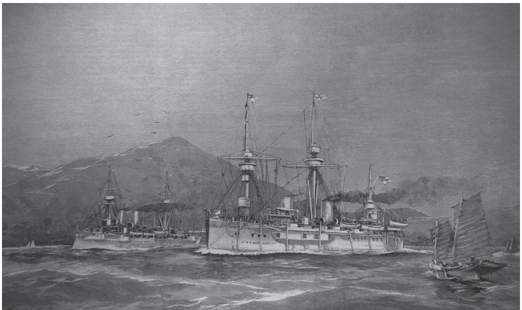


図 16

> もし分艦隊が厦門と周辺島嶼を占領せよと指令を受けたとしても、どこからも抵抗を受けることはないであろう。中国人ならびにここで暮らすヨーロッパの商人たちは、もろ手を挙げてその占領に賛同するであろう。[73]

軍艦の増強と分艦隊の新設に続き、その基地となる港湾植民地の獲得が新たに期待されたのである。

（二）膠州湾進出の描写

これまで述べてきたように、『ライプツィヒ絵入り新聞』は遠方で起きた日清戦争に高い関心を示し、その戦況を挿絵とともに詳しく報道していた。ドイツ政府もこの戦争を機にそれまでの穏健姿勢を変え、居留民保護のため積極的な軍事展開を図った。もっとも、戦争終結時にドイツがロシア、フランスと組んで三国干渉を実施したことは、国内からも驚きをもって受け止められた。それまでドイツは日本に共感を示し、近代化の師弟関係を誇っていたからである。

ドイツが講和条約に介入した背景には、近代化の師匠として弟子の思い上がりを戒める心理が働いたのかもしれない。『ライプツィヒ絵入り新聞』は、「中国人はこれまでよき顧客であった一方、それに対し日本人は物覚えのいい生徒から驚くべき速さで有能かつ危険で傍若無人な競争相手になってしまった」[74]と述べ、ドイツにとって重要な中国市場が日本の脅威にさらされる事態を危惧した。確かに同紙は、日本の近代化そのものに対しては好意的な目で見ていた。しかし、いざ自身の競争相手として浮上すると、日本が「自主創造の努力なしにヨーロッパの製品を卑しい奴隷根性で模倣」[75]したと糾弾し、地域の安い労働力を利用してその製品がアジア太平洋を席巻する事態が恐れられた。「ヨーロッパ、そしてまたドイツの産業は東からの危険（eine Gefahr aus dem Osten）にさらされている」[76]とも述べ、黄禍論の萌芽もそこには見て取れる。

さらにドイツが三国干渉に加わった背景には、もう一つ別の隠された意図があった。一九世紀の中葉以来、一貫して追い求めた拠点植民地に対する野心である。確かに、三国干渉の対価として中国から植民地を譲り受ける当初のもくろみは外れた。しかしドイツは執念深く機をうかがい、一八九七年一一月の宣教師殺害事件を口実に山東半島南岸の膠州湾を軍事占領し、翌年三月に湾岸一帯の租借、および山東半島の鉄道鉱山権益の獲得に成功した[77]。

実は、占領を現場で実行したドイツ海軍にとって、山東半島が思い入れの深い土地であったことはあまり知られていない。その史実は『ライプツィヒ絵入り新聞』の記事を少しさかのぼると見えてくる。一八九六年七月二三日、つまり膠州湾占領事件の一年四か月ほど前、ドイツ海軍の砲艦「イルティス」が山東半島沖で暴風雨に遭遇し沈没した。乗組員八五名中七四名が命を落としたこの海難事故は、国内でも大きく報道された。『ライプツィヒ絵入り新聞』も、殉死した乗組員の名前と略歴に肖像画を添え、巻頭紙面を使って大きく報じている[78]。その後も、沈没の場所や原因、残骸の様子、生存者一一名の帰還行事、上海での追悼碑建立などの続報記事が挿絵入りで掲載され、この事故は「山東半島」の地名とともにドイツ国民の心に刻まれた[79]。

そんななか、海軍は「通商政策的にも戦略的にも中国の東岸で最良の港の一つ」[80]である山東半島南岸の膠州湾をドイツ帝国の名で占領した。今度は悲劇ではなく歓喜の対象として

「山東半島」の名前が紙面を飾ったのである。『ライプツィヒ絵入り新聞』では、ドイツの積極的な経済進出の必然性と開発への期待が示され、近代化した国の当然の「発展過程」として海外植民地の獲得が祝福された(81)。こうした心性は、まさに帝国主義的な膨張志向の一面を示しているが、その植民地主義的な信条をこのとき掲載された図17が如実に示している。そこでは、前を歩く中国人の娘たちにドイツの水兵が愉快気に近づく様子が描かれているが、下に付された説明文には「中国への平和的な接近」とある。つまり、ドイツの膠州湾進出が無血で実行され「平和的」であったことを誇っているわけであるが、この絵は植民地主義に潜むジェンダー的な心性を象徴していた。

図17

　いずれにせよ、膠州湾の獲得はドイツの軍事力をさらに中国へと引き寄せた。『ライプツィヒ絵入り新聞』には、日清戦争時に強化された東アジア駐留海軍がいっそう増強される様子が映し出されている。膠州湾の占領直後、増援部隊として一等装甲艦「ドイチュラント」、二等巡洋艦「カイゼリン・アウグスタ」、三等巡洋艦「ゲフィオン」の三隻（兵員合計一三六四名）が新たに本国から派遣され、「分艦隊」は二個戦隊からなる「艦隊」へ格上げとなった。この新設された東アジア巡洋艦隊の司令官には、皇帝の弟であるハインリヒ大公（海軍少将）が任命され、皇帝、皇族、海軍首脳の見送りを受け出港する様子が三枚の挿絵つきで紙面を飾った(82)（図18）。

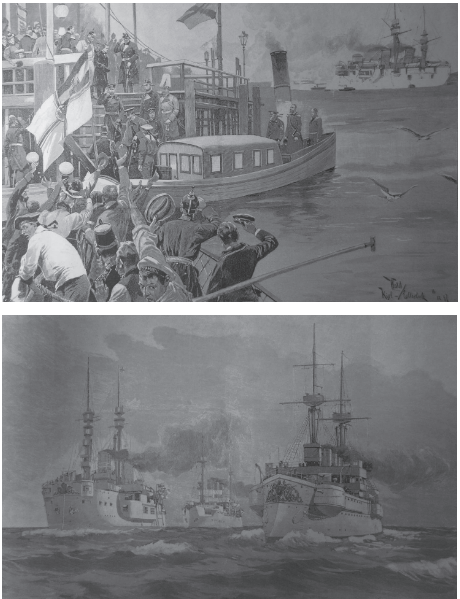


図18

　ナショナルな感情の大波が、この瞬間すべてのドイツ人の心に高く打ちつけている。皇帝のただ一人の弟君であるハインリヒ大公が先週の木曜日に砲が轟くなか祖国の岸を長期にわたって離れることになった。極東において祖国ドイツの名声と名誉をその手で守るために(83)。

この東アジアへ向かうドイツ軍には、民間汽船二隻に分乗した海兵大隊、砲兵隊、工兵隊、合計一五〇〇名の陸上専門部隊が加えられており、そこから膠州湾支配を恒久化する意図が浮かび上がる。[84] 実際、占領から四カ月後に九十九カ年の租借条約が締結され、軍政と民政を統轄するため海軍の将校が膠州領総督として配置された。こうして海軍が租借地の行政を主導する体制が築かれたことで、「ドイツの鷲は爪を地面に突き刺し、いかなる時もつかんだまま離さないであろう」[85]と永続的な植民地支配が期待された。

これ以降、『ライプツィヒ絵入り新聞』には膠州湾租借地と山東権益の光景が頻繁に掲載され、都市や港湾の整備、産業の見込み、中国人集落の様子、駐屯軍の日常などが写真や絵とともに伝えられた。[86] それらの多くは、当時通信員として同紙と深い関係にあった旅行家エルンスト・フォン・ヘッセ＝ヴァルテックの見聞録が元となっていたが、そこには被写体として「リアルな中国人」もしばしば映り込んでいた。ただ、図19のような中国人女性たちの写真に「平均的な女性の姿」というキャプションがつけられ、これを見れば本国に残された兵士の妻たちは嫉妬せず安堵し、逆に兵士たちは憐れであるといった差別や偏見を含んだレポートもそのまま『ライプツィヒ絵入り新聞』に掲載されていた。[87]

図19

日清戦争以後、東アジアを映した挿絵に「ドイツ」の姿が頻繁に入り込む様子はすでに述べたが、上述の通りその傾向は膠州湾の獲得によってさらに強まっていた。それを象徴したのが、東アジア巡洋艦隊の司令官に着任した皇弟ハインリヒ大公の動向に関する記事と図像である。彼を乗せた艦隊の香港到着を伝える記事では、現地のドイツ人社会とイギリス人社会が熱烈に歓迎する様子が報じられた。[88] さらに北上して北京に赴いた際、ハインリヒ大公は中国皇帝から対等な位階者として迎えられたという。『ライプツィヒ絵入り新聞』によれば、「中華帝国五〇〇〇年」の歴史のなかで外国王室の大公がそのような厚遇を受けるのは初めてのことであり、対面の舞台となった万寿山の離宮（頤和園）とともにこの出来事は大きく扱われた。[89] ほかにも大公は行く先々で歓迎を受け、特に注目されるのは漢口を訪れた際の張之洞との宴席である。イギリスが絶対的な地位を有する揚子江流域において、この地方で最も有力な政治家である張之洞らとハインリヒ大公が親交を結んだことは、ドイツ商人が当地への進出をめざしている現状を鑑みると非常に重要な意味があると論じられた[90]（図20）。

こうして、東アジアにおけるドイツの存在感が高まる様子を『ライプツィヒ絵入り新聞』は紙面で追い続けていた。既述の通り、軍事面でのプレゼンスの強化は特に顕著であったが、中国の近代化に貢献するドイツの姿もしばしば記事に取り上げられた。たとえば、日清戦争後の中国軍の洋式改革にドイツ人の教官や兵器が深く寄与している現実が伝えられ、袁世凱が指揮する「新軍（新建陸軍）」の充実ぶりは以下のように評されていた（図21）。

図20

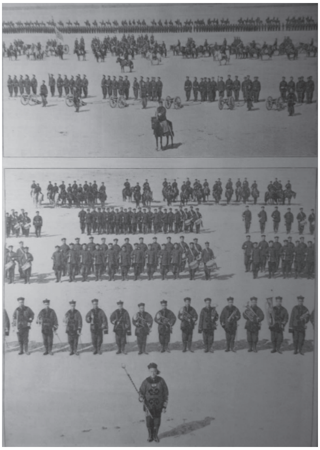


図21

この写真を一目見て分かることは、新軍がこれまでのあらゆる中国の軍隊よりも飛び抜けた外観を持っていることであり、そしてこの軍の演習に居合わせたすべての者たちが言うには、新軍の規律、実践力、武器ともにいい印象を与えるものであるという[91]。

また、ハインリヒ大公が上海滞在中に閲兵した中国軍のエリート部隊（二五〇〇名）も、同じくドイツ人教官の指導の賜物と誇示された。呉淞砲台に駐留するその部隊は、歩兵、砲兵ともに優れた能力を持ち、軍楽隊も編成されるなど、中国軍の洋式化と成長の証として称賛された。ただ、教え込まれた規律と剛健さは教官の手が離れると元の状態に戻るゆえ、ドイツ人による軍隊教育の継続が望まれた[92]。日本に対する軍事指導で得た自信は、こうして中国軍の近代化支援へとドイツを向かわせたのであった。

しかし同時に、中国人に規律を学ばせる実験が成功すると、その巨大な軍隊が「恐るべき敵」になる危険性も『ライプツィヒ絵入り新聞』は予感していた。特に、建設中の鉄道網が完成した場合、中国の軍隊が迅速に移動展開する潜在的な恐怖は小さくなかった[93]。この記事が出た直後、悪夢のシナリオは現実のものになろうとしていた。

（三）義和団戦争の描写

義和団蜂起のニュースは、『ライプツィヒ絵入り新聞』の

一九〇〇年六月二一日付紙面に初めて登場し、以降この年の年末までほぼ毎号にわたって詳報が挿絵入りで掲載された。東アジアがドイツにとって「まなざしの対象」から「行動の舞台」へと変化していたからである。義和団による焼打ちや破壊の惨劇に始まり、北京の公使団に迫る危機、列国の部隊がその救援に向かう様子、中国政府が義和団に肩入れしたことで「対中戦争」へ発展した経緯、列国の軍艦が大沽砲台と交わした激戦の模様などがそこでは時系列で報じられた。特に、大沽攻防戦にドイツから唯一参加し、死傷者を出しながら奮闘した砲艦「イルティス」（前述の遭難した砲艦と同名の後継艦）の活躍に光が当てられた(94)。つまり、このときドイツ国内の目は東アジアの戦場で戦う「ドイツ軍」に注がれたのである。それゆえ、ドイツ軍艦の陸戦隊約五〇〇名を含む八カ国連合軍による天津攻略戦を伝えた際には、戦闘で死傷したドイツ人将校たちを顕彰するため顔写真が紙面に並んだ(95)。また、現地で軍の指揮を執る将軍たちの肖像と略歴も頻繁に掲載され、遠くの前線に立つ彼らの雄姿を読者は想起するのであった(96)。

とはいえ、義和団戦争では北京と天津が中国側の包囲を受けたことで、外交団の安否など詳しい情報の確認に支障を来していた(97)。また戦闘自体も、兵力で圧倒する中国軍に列強が苦戦する様子が伝えられ、各国が続々と増援隊を派遣する状況が報じられた。こうした先行き不透明な情勢のなか、現地に領土と軍隊を有するドイツは内外からさらなる積極的な行動を求められることになる。開戦当時、ドイツの在東アジア戦力は巡洋艦五隻（乗組員二〇三〇名）、砲艦二隻（二四二名）、巡洋艦隊の交代要員として到着した兵一二〇〇名、そして青島駐屯軍二〇〇〇名の計約五五〇〇名であったが、新たに国内から海兵二個大隊と工兵隊など二五〇〇名を派遣する決定が下された。ほかにも、砲艦「ティーガー」が東アジアへ向かい、大型巡洋艦「フュルスト・ビスマルク」と砲艦「ルクス」もキールで出港の準備を整えていた。その際、皇帝が乗組員の激励に訪れる様子を撮影した写真が『ライプツィヒ絵入り新聞』に掲載され、今次の戦争の重要性が世論に周知された(98)（図22）。

図22

『ライプツィヒ絵入り新聞』の義和団戦争報道に見られる最大の特徴は、本国から派遣される部隊を描いた「出征シーン」にあったといえる。同紙は、続々と戦地へ向かう兵士の様子を挿絵入りで伝えており、たとえば、キールの第一海兵大隊一一六二名が駅に向かう行進の様子を次のように報じて

いる。

営庭の門前では見送りに来た何千人もの人々が待ち構え、通りから通りへ雪崩のように人がごった返した。各家の窓には人が密集し、絶え間なく兵士へ向けて花が放られ、勇ましい行進曲の響きのなか彼らは高揚した気分で通りを進んだのである[99]。

さらに同隊がヴィルヘルムスハーフェン行きの特別軍用列車に乗り込む際、駅で二万人の市民から見送りを受けており、その場面は以下のような印象的なフレーズで締めくくられている（図23）。

何千もの白いハンカチがひらひらと舞った。繰り返し何度も別れの挨拶と叫びが発せられ、帽子があちらこちらで振られた。列車の最後尾の車両が最後のカーブを曲がり、その姿が見えなくなるまで[100]。

図23

翌日、ヴィルヘルムスハーフェンに到着した第一海兵大隊は皇帝夫妻に出迎えられ、華々しい出発式の後、二隻の民間船に分乗して東アジアへ向かった[101]。その後も中国遠征軍の出発は続き、歩兵二個旅団、騎兵一個連隊、野戦砲兵一個連隊、工兵一個大隊で構成される陸上軍が民間汽船で本国を離れることになった。その際、皇帝夫妻や皇族、宰相、外務長官、陸軍大臣、軍高官が列席する壮大な式典が挙行され、『ライプツィヒ絵入り新聞』は皇帝のスピーチ文を添えて出征の光景を印象深く伝えた[102]（図24）。このように、同紙には本国から次々と戦場へ向かう兵士の姿が掲載され、同時に戦死した兵士の遺影も折に触れて登場した。義和団戦争は、ドイツにとって対仏戦争以来三〇年ぶりとなる大規模な外地出兵であったが、第一次世界大戦時の出征シーンを先取りするようなナショナリスティックな光景が絵入り新聞に描かれていたのである。

図24

それゆえ、任務を終え帰還する兵士たちが英雄として描かれたのも当然のことであった。一九〇〇年の暮れ、中国から

戻った兵士九八七名がヴィルヘルムスハーフェンに到着した際、肌寒い夜にもかかわらず多くの市民が最初の帰還者たちを出迎えた。その後、彼らが特別列車でベルリンに到着すると、歓喜の旗が掲げられた街中の通りを人が埋め尽くし、皇帝夫妻、皇族、陸軍大臣、海軍長官、参謀総長、軍令部長、軍の将官、ベルリン駐在の各国軍人、市の要人たちが兵士を盛大に出迎える様子が写真つきで報じられた（図25）。戦地から戻った兵士たちは、奪取した義和団の旗と大沽要塞の大砲を勝利の証として持ち帰り、それらを集った民衆に向けて誇らしく掲げたという(103)。

なお、中国の戦場をめざしたのはこれら陸上戦闘用の部隊にとどまらなかった。ドイツ政府は、戦艦四隻、小型巡洋艦一隻（乗組員合計二四六〇名）からなる「中国派遣ドイツ装甲艦戦隊」を編成し、キールを出港する際には皇帝や皇族臨席の盛大なセレモニーが催された(104)（図26）。今回の艦隊出動は、数年前に始まった大海軍建設の意義を世論に再認識させ、予算の獲得に向けてさらなる宣伝効果を持つものとなった(105)。第一次世界大戦まで続く熱狂的な海軍熱を考えるうえでも、義和団戦争がドイツの歴史に与えた影響は決して小さくない(106)。

図25

図26

『ライプツィヒ絵入り新聞』の義和団戦争報道には、「出征シーン」以外にもう一つ顕著な特徴があった。ドイツ単独の行動ではなく、「列強のなかのドイツ」を強く印象づける演出である。戦場における共同作戦の実情はもちろんのこと、列強の一体性と連合軍へのドイツの貢献を称える論調がそこでは強く表れていた。たとえば、東アジア派遣軍の準備部隊（将校二〇名、兵士一二二二名）が陸路で地中海の港へ向かう際、オーストリアやイタリアの人々から熱狂的な歓迎を受ける様子が伝えられている。その際、「集った皆が互いの友情と中国における文明の勝利への願望を表明した」(107)とされ、東洋の敵を前にした西洋文明の連帯意識が紙面で強調された。

しかし、何よりも「列強のなかのドイツ」を象徴したのが、八カ国連合軍の最高司令官に就任したアルフレート・フォン・ヴァルダーゼー（ドイツ陸軍元帥）をめぐる報道である(108)。彼の部隊が現地に到着したとき、すでに戦争の決着はつき北京の包囲は解かれていたが、『ライプツィヒ絵入り新聞』は多国籍軍のトップに就いたドイツ軍人の雄姿を詳細に追っ

ていた。具体的には、現地で実施されたパレードの観閲や市内巡回のほか、訪れた各所で列強の現地指揮官や幹部将校、外交団や居留民社会、各国の儀仗兵や兵士から彼が盛大な歓迎を受ける様子が伝えられた[109]（図27）。ドイツの市民からしてみれば、全列強で構成される連合軍の最高指揮官がイギリス人でもロシア人でもなく、ドイツ人であったことに特別な思いがあったのである。

一九世紀最後の年に起きた義和団戦争は、ドイツが帝国として統一されてから初となる対外戦争であった。つまり、ドイツにとってこの戦争は、一九世紀後半の近代化がもたらした成果を示す檜舞台でもあった。三〇年前には存在しなかった「艦隊」と「植民地」を東アジアに持ち、本国からおよそ一万キロメートル離れたこの地に大軍を派遣する実力を備えた事実こそ、ドイツの近代化がグローバルな意味で一つの到達点を迎えたことの証となった。しかし単に、心理的・物理的な距離が縮まったという点にとどまらず、東アジアはドイツが世界的に活躍を見せるステージともなった。実際、帝国主義勢力の最高司令官にドイツの軍人が就いた栄誉は、その新たな時代の到来をドイツ国民に告げる作用を持った。ドイツにとって海外世界は、単に貿易上の利益だけを追い求める場所でも、文化的な好奇心を向ける対象でもなく、自身の国力と世界における地位を映す鏡となったのである。

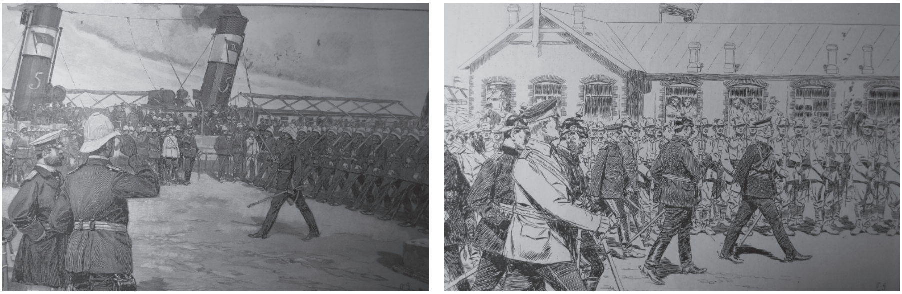


図27

おわりに

一九世紀後半の『ライプツィヒ絵入り新聞』を通覧すると、目にする記事のほとんどはドイツ語圏やヨーロッパ内の事柄に関するニュースであることが分かる。しかし一九世紀の終わりに近づくと、海外事情を取り上げた記事が増え、なかでも東アジアは強い関心を集める地域へと変化していた。ここでは扱えなかったが、アフリカや太平洋島嶼に関連する記事も一九世紀の後半を通じて掲載数が目立って増えていた。この新たに見られる傾向は、単に同紙の関心が異世界へ広がったという解釈だけでは説明できない。むしろ、より直接的な関心、つまりドイツの対外的な行動に合わせて記事にすべき

対象地域が拡大したと見るべきであろう。世紀の終わりに『ライプツィヒ絵入り新聞』が盛んに映し出したものが、海外に派遣される自国の軍艦、植民地、戦争であったことはそのことを明確に物語る。つまり、東アジアを例にとると、巡洋艦隊、膠州湾租借地、中国の大地に立つハインリヒ大公とヴァルダーゼー元帥、そして戦場の兵士たちの姿は、挿絵や写真で伝えられることで「世界におけるドイツ」像をより強くドイツ社会に印象づけたのである。

こうして、国内の近代化を達成したドイツの先にあったものは、「世界におけるドイツ」という新たな自己認識の探求であった。イギリスに並び立つことを次なる目標に掲げ、そのために必要となる近代海軍と植民地を手に入れ、帝国主義共同体の主力として最前線で戦う自国兵士、一九世紀末の『ライプツィヒ絵入り新聞』には過去と異なるドイツの自画像が映し出されていた。そうした過程のなかで東アジアには新たな意味が付与され、エキゾティックなまなざしの対象としてだけでなく、ドイツがそこで光り輝く空間として描かれていくのであった。

しかしながら、この「世界におけるドイツ」像が現実と乖離していたことを当時のドイツ人はどこまで認識していたであろうか。ドイツ軍の東アジア派遣は、イギリスのエンパイア・ルートを借用できたからこそ可能となったものであり、現地での活躍を伝えるニュースや図像もまた、この覇権国が構築した通信郵便網を通じてドイツ本国にもたらされていた。さらには、世界に展開するドイツの軍隊と植民地の生存は、イギリス帝国のインフラに強く依存したものであり、ドイツ人が思い描く「世界におけるドイツ」とは、実際のところ自立不可能な脆い台の上に築かれた虚構であった(110)。新たな世界認識のもとでのドイツの行動は、その「世界におけるドイツ」を支えたイギリスとの関係を次第に悪化させることになる。そしてまた、近代化の支援を通じて育んだ日本や中国との友好関係もドイツは自ら掘り崩していくのである。

註

(1)　鈴木健夫、P.スノードン、G.ツォーベル『ヨーロッパ人の見た文久使節団　イギリス・ドイツ・ロシア』早稲田大学出版部、二〇〇五年、工藤章、田嶋信雄編『日独関係史　一八九〇－一九四五』全三巻、東京大学出版会、二〇〇八年、鈴木楠緒子『ドイツ帝国の成立と東アジア　遅れてきたプロイセンによる「開国」』ミネルヴァ書房、二〇一二年、福岡万里子『プロイセン東アジア遠征と幕末外交』東京大学出版会、二〇一三年、浅田進史『ドイツ統治下の青島　経済的自由主義と植民地社会秩序』東京大学出版会、二〇一一年、小池求『二〇世紀初頭の清朝とドイツ　多元的国際環境下の双方向性』勁草書房、二〇一五年、田嶋信雄、工藤章編『ドイツと東アジア　一八九〇－一九四五』東京大学出版会、二〇一七年。以下の著作はその例外的なものであるが、近現代の長い時期を扱ったゆえ断片的な分析にとどまっている。中埜芳之『ドイツ人がみた日本　ドイツ人の日本観形成に関する史的研究』三修社、二〇〇五年。

（2） Helmuth Stoecker, *Deutschland und China im 19. Jahrhundert. Das Eindringen des deutschen Kapitalismus* (Berlin, 1958); Wolfgang Petter, *Die überseeische Stützpunktpolitik der preußisch-deutschen Kriegsmarine 1859-1883* (Freiburg, 1975); Rolf-Harald Wippich, *Japan und die deutsche Fernostpolitik 1894-1898. Vom Ausbruch des Chinesisch-Japanischen Krieges bis zur Besetzung der Kiautschou-Bucht. Ein Beitrag zur Wilhelminischen Weltpolitik* (Stuttgart, 1987).

（3） Sven Saaler / Kudō Akira / Tajima Nobuo (eds.), *Mutual Perceptions and Images in Japanese-German Relations, 1860-2010* (Leiden, 2017). もっとも、イギリスやフランスに関しては、一九世紀後半の東アジア・イメージを取り上げた研究は多数存在する。たとえば、東田雅博『大英帝国のアジア・イメージ』ミネルヴァ書房、一九九六年、同『図像のなかの中国と日本　ヴィクトリア朝のオリエント幻想』山川出版社、一九九八年、寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』思文閣出版、二〇一七年、Toshio Yokoyama, *Japan in the Victorian Mind: A Study of Stereotyped Images of a Nation 1850-80* (Basingstoke, 1987) など。

（4） ［イラストレイテッド・ロンドン・ニュース編］金井圓編訳『描かれた幕末明治　イラストレイテッド・ロンドン・ニュース　日本通信　一八五三－一九〇二』訂正第二刷、雄松堂書店、一九七四年、横浜開港資料館編『「イリュストラシオン」日本関係記事集　一八四三－一九〇五』全三巻、横浜開港資料館、一九八六－一九九〇年、同編『「ル・モンド・イリュストレ」日本関係さし絵集』横浜開港資料普及協会、一九八八年、朝比奈美知子編訳、増子博調解説『フランスから見た幕末維新　「イリュストラシオン日本関係記事集」から』東信堂、二〇〇四年。

（5） Sebastian Dobson / Sven Saaler (hg.), *Unter den Augen des Preußen-Adlers: Lithographien, Zeichnungen und Photographien der Teilnehmer der Eulenburg-Expedition in Japan, 1860-61* ［プロイセン－ドイツが観た幕末日本　オイレンブルク遠征団が残した版画、素描、写真］(Müinchen, 2011).

（6） Hoi-eun Kim, Imaginary Terrain of German Orientalism: The Image of Japan in *Die Gartenlaube*, 1854-1902, in: Lee M. Roberts (ed.), *Germany and the Imagined East* (Newcastle upon Tyne, 2009); Rolf-Harald Wippich, The Image of Japan and the Japanese in the German Satirical Journals Kladderadatsch and Simplicissimus, 1853-1914, in: Saaler / Kudō / Tajima (eds.), *Mutual Perceptions and Images in Japanese-German Relations*.

（7） Peter Pantzer, Japan in Early Twentieth-century European Picture Postcards, in: Saaler / Kudō / Tajima (eds.), *Mutual Perceptions and Images in Japanese-German Relations*; スヴェン・サーラ、稲葉千晴編『日露戦争百周年記念展覧会「ヨーロッパから観た日露戦争　版画新聞、絵葉書、錦絵」』ドイツ－日本研究所、二〇〇五年。

（8） メールによる日本イメージ研究も一枚絵や絵入り雑誌に描かれた日本像を探っているが、数点の挿絵を切り取って部分的な日本像を提示したのみで、むしろそれらに記載されていたテクストの方に関心を向けている。Heinrich Mehl, Das wahre Gesicht Japans? Das Japan-Bild in deutschen illustrierten Zeitschriften der letzten 150 Jahre, in: Ders. /

Hansjörg Meyer (hg.), *Vertraute Fremde. Anmerkungen zu Kultur, Politik und Pädagogik in Japan und Deutschland* (München, 1994).

（9）拙稿「一九世紀中葉のドイツにおける『ライプツィヒ絵入り新聞』の登場とその意義　ノヴァラ号の世界周航（一八五七－五九）に関する報道を事例として」『政治学研究論集』、第二二号、二〇〇五年。

（10）*Leipziger Illustrirte Zeitung*（以下、L.I.Z. と略記）, 1. 7. 1843, S. 1.

（11）Ebenda.

（12）拙稿「ドイツ海軍　海軍の創建と世界展開」三宅正樹、石津朋之、新谷卓、中島浩貴編『ドイツ史と戦争　「軍事史」と「戦争史」』彩流社、二〇一一年。

（13）Matthew S. Seligmann / Frank Nägler / Michael Epkenhans (eds.), *The Naval Route to the Abyss: The Anglo-German Naval Race 1895-1914* (Farnham, Surrey, 2015).

（14）Lawrence Sondhaus, *Preparing for Weltpolitik: German Sea Power before the Tirpitz Era* (Annapolis, 1997).

（15）L.I.Z., 31. 8. 1872「陸軍中将アルブレヒト・フォン・シュトシュ　ドイツ帝国海軍本部長」.

（16）L.I.Z., 7. 12. 1872「ドイツの装甲コルベット艦ハンザ」, 13. 12. 1873「ブレドウにおけるドイツのフリゲート艦プロイセンの進水式」, 10. 10. 1874「キールにおける新たな装甲艦の進水」, 14. 11. 1874「ドイツの装甲艦プロイセンとハンザ」, 2. 1. 1875「ドイツの新たな装甲フリゲート艦カイザー」, 20. 11. 1875「ドイツ装甲艦隊」.

（17）L.I.Z., 7. 10. 1876「ヴィルヘルムスハーフェン」, 7. 10. 1876「キールの軍港」.

（18）L.I.Z., 20. 7. 1872「海軍兵士の操練」.

（19）L.I.Z., 28. 12. 1872「最初のドイツ帝国艦隊」, 30. 8. 1873「カルタヘナ沖の装甲フリゲート艦　フリードリヒ・カール」, 12. 9. 1874「スペイン水域におけるドイツの軍艦」, 5. 3. 1881「祖国海軍の最近の成長ぶり」, 14. 6. 1884「スールー海におけるコルベット艦ライプツィヒの事故」, 31. 1. 1885「祖国の艦隊による海外ドイツ権益の保護」.

（20）Holmer Stahncke, *Die diplomatischen Beziehungen zwischen Deutschland und Japan 1854-1868* (Stuttgart, 1987); 鈴木『ドイツ帝国の成立と東アジア』、福岡『プロイセン東アジア遠征と幕末外交』。

（21）Dobson / Saaler (hg.), *Unter den Augen des Preußen-Adlers*; オイレンブルク著、中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記』上下巻、雄松堂書店、一九六九年。

（22）L.I.Z., 24. 11. 1877「日本、中国、インドの芸術・工業品」.

（23）L.I.Z., 24. 10. 1868「オーストリア日本遠征の艦船」.

（24）東田雅博『シノワズリーか、ジャポニスムか　西洋世界に与えた衝撃』中央公論新社、二〇一五年。

（25）L.I.Z., 18. 10. 1862「東アジア文化の図像　二　中国人商人」, 8. 2. 1873「中国皇帝の婚礼」, 22. 2. 1873「中国の厦門」, 17. 5. 1884「中国の戦争画」, 20. 2. 1886「中国人の間で活躍する草分け的女医」, 15. 10. 1887「ドイツ皇帝に対する中国皇帝の祝い状と誕生日の贈り物」, 26. 10. 1895「中国の『絵入り新聞』」, 10. 3. 1898「中国から　万里の長城」.

（26）L.I.Z., 3. 7. 1875「中国人女性の足」, 11. 12. 1875「カリフォルニアの中国人」, 1. 1. 1876「サンフランシスコにおける中国人の正月祭り」, 4. 6. 1887「中国の海賊」, 11. 5. 1889「中国の住民、国民生活、都市の風景」, 10. 11. 1894「中国から届いた

光景」, 18. 11. 1897「中国と日本に関する素晴らしい新刊」, 30. 8. 1900「北京」.

(27) L.I.Z., 11. 10. 1873「北京における公使の謁見」, 2. 12. 1897「中国の新建陸軍」.

(28) L.I.Z., 11. 5. 1889「中国の住民、国民生活、都市の風景」.

(29) L.I.Z., 1. 6. 1861「ベルリンから日本へ　七」, 9. 8. 1862「ベルリン王宮の白間における日本使節団との接見」, 29. 11. 1862「東アジア文化の図像　三、日本の貴族」.

(30) L.I.Z., 2. 2. 1861「プロイセン艦隊の東アジア水域への遠征　五」, 16. 2. 1861「プロイセン艦隊の東アジア水域への遠征　六」, 15. 6. 1861「プロイセン艦隊の東アジア水域への遠征　七」, 30. 9. 1870「日本の台風」, 29. 3. 1873「日本のサギと鶴」, 9. 12. 1882「日本の鴨と雁」, 1. 5. 1886「ニッポン朱鷺コウ」, 2. 1. 1892「日本の地震」.

(31) L.I.Z., 11. 6. 1870「挿絵で見る日本　一」, 19. 10. 1872「日本からの挿絵」.

(32) L.I.Z., 25. 6. 1870「挿絵で見る日本　二」, 9. 7. 1870「挿絵で見る日本　三」.

(33) L.I.Z., 25. 6. 1870「挿絵で見る日本　二」, 21. 2. 1874「日本の正月祭り」, 8. 5. 1875「チェス　日本の将棋」, 21. 1. 1882「日本と中国のゲーム　碁」, 3. 6. 1882「碁ゲーム」, 25. 9. 1886「日本のカードゲーム」.

(34) L.I.Z., 14. 12. 1867「日本の凧揚げ会社」, 9. 3. 1872「ベルリンにおける日本と中国の物品展」, 24. 6. 1876「日本の工具」, 1. 3. 1884「日本の庭師の芸当」, 29. 3. 1884「東京の火消し」, 10. 3. 1888「栽培植物としてのキク」, 9. 1. 1897「新年の踊り子」.

(35) L.I.Z., 6. 9. 1873「ウィーン万国博覧会より」.

(36) L.I.Z., 28. 6. 1873「ウィーン万国博覧会より」, 19. 7. 1873「ウィーン万国博覧会より」, 18. 10. 1873「ウィーン万国博覧会より」, 6. 12. 1873「ウィーン万国博覧会より」.

(37) L.I.Z., 10. 8. 1878「パリ万国博覧会からの絵入り通信　四」, 28. 9. 1878「パリ万国博覧会からの絵入り通信　一〇」.

(38) L.I.Z., 16. 11. 1872「日本からの挿絵　二」, 16. 1. 1892「東京にある日本の大学」.

(39) L.I.Z., 11. 1. 1873「日本から届いた絵」, 17. 7. 1875「古き日本」, 31. 1. 1885「日本の典型」.

(40) L.I.Z., 9. 7. 1870「挿絵の日本」, S. 37.

(41) Mehl, Das wahre Gesicht Japans?, S. 39-43.

(42) Kim, Imaginary Terrain of German Orientalism, pp. 188-190.

(43) L.I.Z., 8. 2. 1873「中国皇帝の婚礼」, S. 98.

(44) L.I.Z., 11. 10. 1873「北京における公使の謁見」.

(45) L.I.Z., 29. 1. 1876「日本の茶会」, S. 86.

(46) L.I.Z., 11. 10. 1873「北京における公使の謁見」, S. 275.

(47) L.I.Z., 10. 11. 1894「中国から届いた光景」, S. 534.

(48) Ebenda.

(49) David M. Crowe, Sino-German Relations, 1871-1917, in: Joanne Miyang Cho / David M. Crowe (eds.), *Germany and China: Transnational Encounters since the Eighteenth Century* (New York, 2014), p. 76, 87.

(50) 東田雅博「イギリスのイラスト紙・誌が見せた一九世紀の世界」南塚信吾責任編集『情報がつなぐ世界史』ミネルヴァ書房、二〇一八年、一五〇頁。

(51) L.I.Z., 29. 9. 1894「日本人女性の暮らし」, S. 354.

(52) L.I.Z., 9. 7. 1870「挿絵の日本　三」, S. 37.

(53) L.I.Z., 28. 2. 1880「シャムの文化状態」, S. 169, 172.

(54) L.I.Z., 29. 9. 1894「日本人女性の暮らし」, S. 354.
(55) L.I.Z., 2. 6. 1883「ハノイ」, 27. 10. 1883「新たに開国した国」, 16. 1. 1886「朝鮮」, 5. 8. 1893「バンコク（シャム）の絵」, 12. 8. 1893「バンコクの絵　二」, 16. 12. 1893「シャムの絵　三」.
(56) 松村昌家「『イラストレイテッド・ロンドン・ニューズ』の東アジア　日清戦争期の朝鮮報道を中心に」川本皓嗣、松村昌家編『ヴィクトリア朝英国と東アジア』思文閣出版、二〇〇六年、二二四－二二六頁。
(57) Rolf-Harald Wippich , Japan Enthusiasm in Wilhelmine Germany: The Case of the Sino-Japanese War, 1894-5, in: Christian W. Spang / Rolf-Harald Wippich (eds.), *Japanese-German Relations, 1895-1945: War, Diplomacy and Public Opinion* (London, 2006); Wippich, *Japan und die deutsche Fernostpolitik*.
(58) L.I.Z., 4. 8. 1894「日本と中国の軍隊」, S. 137.
(59) L.I.Z., 1. 9. 1894「日本の艦隊」, S. 241.
(60) L.I.Z., 12. 1. 1895「日清戦争」, S. 38.
(61) L.I.Z., 2. 2. 1895「日本海軍の制服姿」, S. 118.
(62) L.I.Z., 1. 9. 1894「日本の艦隊」, S. 241.
(63) L.I.Z., 6. 10. 1894「日本陸軍の施設」, 12. 1. 1895「日清戦争」.
(64) L.I.Z., 1. 9. 1894「日本の艦隊」.
(65) L.I.Z., 23. 3. 1895「東アジアの戦場から」.
(66) L.I.Z., 12. 1. 1895「日清戦争」, S. 38.
(67) L.I.Z., 30. 8. 1900「日本軍の軍服」, S. 311.
(68) L.I.Z., 2. 2. 1895「日本海軍の制服姿」, S. 118.
(69) L.I.Z., 13. 10. 1894「中国の要塞」.
(70) L.I.Z., 27. 10. 1894「東アジアの戦場に派遣されたドイツ艦隊」, S. 464.
(71) Ebenda.
(72) L.I.Z., 9. 5. 1896「厦門碇泊中のドイツ艦隊」, S. 564.
(73) Ebenda.
(74) L.I.Z., 13. 7. 1895「ヨーロッパと東アジア」, S. 42.
(75) Ebenda.
(76) Ebenda.
(77) 拙稿「一九世紀末ドイツ帝国の膠州湾獲得」『政治学研究論集』二七、二〇〇七年。
(78) L.I.Z., 8. 8. 1896「ドイツ砲艦イルティスの沈没」.
(79) L.I.Z., 9. 1. 1897「救助されたイルティス乗組員が前年一二月二三日に帰国」, 6. 2. 1897「ドイツ砲艦イルティスの残骸」, 11. 11. 1897「我が海軍について　砲艦イルティスの補充艦」, 6. 10. 1898「上海のイルティス追悼碑」, 12. 1. 1899「上海のイルティス追悼碑の除幕」.
(80) L.I.Z., 25. 11. 1897「膠州湾」, S. 722.
(81) L.I.Z., 27. 1. 1898「東中国における我々の獲得物」, S. 100.
(82) L.I.Z., 23. 12. 1897「東アジアのハインリヒ・フォン・プロイセン大公」.
(83) Ebenda, S. 876.
(84) L.I.Z., 30. 12. 1897「ヴィルヘルムスハーフェンにおける中国派遣陸上部隊の乗船」.
(85) L.I.Z., 31. 3. 1898「新任の膠州領総督ローゼンダール海軍大佐」.
(86) L.I.Z., 31. 3. 1898「膠州湾からの絵　一」, 7. 4. 1898「膠州湾からの絵　二」, 14. 4. 1898「中国における我がドイツの租借地からの絵」, 12. 5. 1898「膠州湾からの絵」, 30. 6. 1898「膠州湾からの絵」, 29. 9. 1898「ドイツ領中国から　ドイツの山東鉄道敷設予定地沿いで」, 9. 2. 1899「将来の膠州湾」, 8. 2. 1900

「青島の発展」, 19. 7. 1900「ドイツ領中国についてのこと」.
(87) L.I.Z., 26. 5. 1898「膠州湾から　我々の特別通信員より」.
(88) L.I.Z., 2. 6. 1898「香港のハインリヒ大公」.
(89) L.I.Z., 14. 7. 1898「中国におけるハインリヒ大公」.
(90) L.I.Z., 28. 9. 1899「武昌の張之洞と並ぶハインリヒ大公」.
(91) L.I.Z., 2. 12. 1897「中国の新建陸軍」, S. 762.
(92) L.I.Z., 28. 7. 1898「中国におけるハインリヒ大公」.
(93) L.I.Z., 23. 11. 1899「中国の呉淞砲台の軍隊」.
(94) L.I.Z., 21. 6. 1900「中国における義和団の蜂起」, 28. 6. 1900「砲艦『イルティス』の勇士たち」, 28. 6. 1900「中国における戦争」, 12. 7. 1900「大沽の戦い」.
(95) L.I.Z., 5. 7. 1900「中国における戦争」, 5. 7. 1900「シーモア遠征部隊に加わったドイツ人海軍将校」.
(96) L.I.Z., 12. 7. 1900「ベンデマン中将　ドイツ東アジア巡洋艦隊の司令官」, 12. 7. 1900「ガイスラー少将　中国派遣ドイツ装甲艦戦隊の司令官」, 19. 7. 1900「中国派遣ドイツ軍の司令官たち」, 26. 7. 1900「中国派遣ドイツ軍の司令官たち　二」.
(97) 義和団戦争時、事態の急展開に挿絵や写真の入手が追いつかず、『ライプツィヒ絵入り新聞』で毎号掲載される関連記事には戦争とは直接無関係の風景画や中国各都市の過去の写真が添えられた。結果として、中国のリアルな実像が義和団戦争を機に読者に届くことになった。
(98) L.I.Z., 28. 6. 1900「中国における戦争」.
(99) L.I.Z., 12. 7. 1900「キールの第一海兵大隊の出発」, S. 53.
(100) Ebenda, S. 54.
(101) L.I.Z., 12. 7. 1900「中国遠征隊の出発」.
(102) L.I.Z., 26. 7. 1900「ドイツの東アジア遠征軍」, 2. 8. 1900「ブレーマーハーフェンにおけるヴィルヘルム皇帝のスピーチ」, 9. 8. 1900「デベリッツの兵営から出発する東アジア派遣軍」.
(103) L.I.Z., 20. 12. 1900「任務を終えた中国戦線兵士たちの帰還」.
(104) L.I.Z., 19. 7. 1900「中国へ向けて出発する戦艦戦隊」.
(105) L.I.Z., 15. 6. 1899「我が海軍から　戦艦カイザー・ヴィルヘルム・デア・グローセ」.
(106) Thoralf Klein, Propaganda und Kritik. Die Rolle der Medien, in: Mechthild Leutner / Klaus Mühlhahn (hg.), *Kolonialkrieg in China. Die Niederschlagung der Boxerbewegung 1900-1901* (Berlin, 2007); Mechthild Leutner, »Bezopfte Heiden«. Zeitgenössische Bilder von Boxern und Chinesen, in: Leutner / Mühlhahn (hg.), *Kolonialkrieg in China.*
(107) L.I.Z., 2. 8. 1900「チロルとイタリアを通過するドイツ軍部隊」, S. 171.
(108) L.I.Z., 16. 8. 1900「中国における連合軍最高司令官」, 6. 9. 1900「ヴァルダーゼー伯爵の軍舎」.
(109) L.I.Z., 8. 11. 1900「中国における戦争から」, 29. 11. 1900「中国における戦争から」, 6. 12. 1900「中国における戦争から」.
(110) 拙稿「太平洋におけるドイツ植民地帝国の電信ネットワーク　コミュニケーション環境から見たグローバル帝国の実像」『政治経済史学』五八八、二〇一五年、「第一次世界大戦前のドイツ海軍と太平洋のイギリス植民地　海軍を媒介とする帝国支配者の協調」『現代史研究』六一、二〇一五年。

（清泉女子大学）